59 富士川橋

ふじがわばし

静岡県の東部を流れている富士川には、「富士川橋」とよばれる橋が五つある。河口から国道１号線バイパスの新富士川橋、東海道新幹線と東海道本線の鉄道橋、現在静岡県管理の県道橋そして東名高速道路の橋である。これらの橋が東海道ベルト地帯を支えている。

本文主題の静岡県管理の富士川橋は、大正13年（1924）８月13日に開通した。

この橋の歴史は、明治の初め、岩渕・水神森の渡し船の近くに、はじめて木造の有料橋が架設されたことに始まる。この橋はたびたび流失したため、元岩渕村の斉藤住郎らを中心に、架橋組合が組織され、組合持ちの橋が架けられた。

この木橋は大正末期まで使われていたが、国道１号線を通す橋としてもっとしっかりした橋に架け替えたいということで、鋼橋を架けることになった。工費は橋梁上下部だけで69万円、前後の取付道路工事を含めると、85万円である。

開通式は「老若男女５万人、実に空前の賑わい」（公務日誌）のなかで取り行なわれ、橋は目出たく供用を開始した。

ところで、川は自然の大きな障壁として、戦国武将をはじめ、徳川幕府も巧みに利用した。天下の大街道である東海道が交差する遠江や駿河の天竜川、大井川、安倍川、富士川、瀬戸川、興津川などの大河川には架橋しなかった。理由は技術的にむずかしいこと、宿場町の賑わいを保つこと、橋の維持管理に費用がかかることなどであるが、これらの河川に橋を架けることを嫌った家康の遺言によったとする説もある。天竜川と富士川は渡船で、大井川や安倍川などは徒渉方式（No.53 安倍川橋参照）で川を渡っていた。

富士川には舟橋が架けられた歴史がある。平安時代の承和２年（835）、朝廷が奈良の大安寺の僧忠一に命じて架けたのが最初の舟橋である。豊臣秀吉は天正18年（1590）小田原攻めのとき、多くの兵を一度に渡すため舟橋を架けさせた。

江戸時代、朝鮮から400人にも及ぶ使節団が来日し、江戸への往復のために、舟橋が架けられた。使節団が通りすぎると橋は取り外され、帰りに再び架け直された。日本人は渡ることが許されなかった。

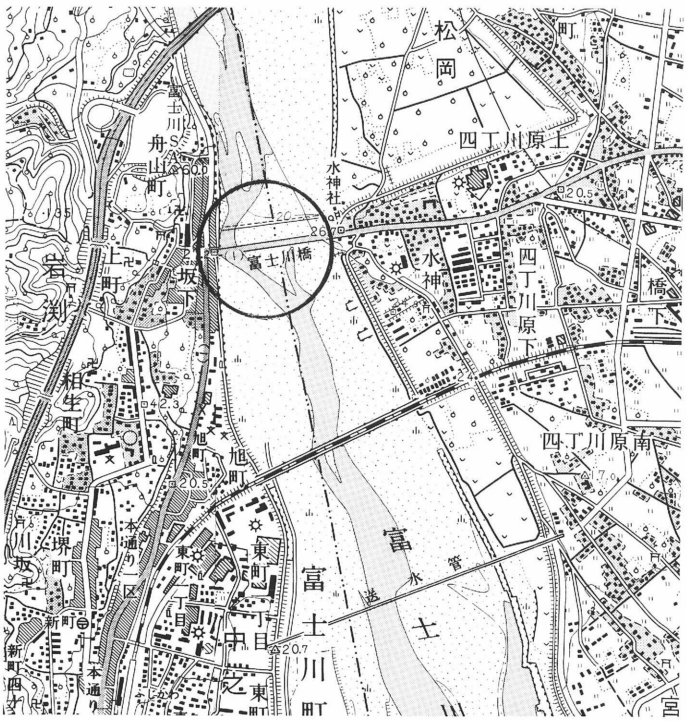
車社会をむかえ、東名高速道路や国道１号線バイパスが完成したが、本橋の利用者は依然と多く、特に朝夕の混雑は著しく、富士庵原（いはら）地区の交通のネックになってきた。

富士川橋に左折用レーンを設けるため、右岸側の２径間を拡幅する工事が、昭和61年11月から63年５月までおこなわれた。現橋の下流側に新しい橋を架けて置き、現橋を上流側に横移動して下流側の新しい橋を現橋の位置まで横移動させる工法でおこなわれた。交通を止めたのは、１週間程度の短期間であった。

なお、この橋は昭和51年（1976）、建設省から静岡県に移管された。〔ＨＩ〕

竣工年月：大正13年（1924）８月13日
所在地：静岡県富士市
河川名：富士川
橋長・幅員：399.109m×7.3m（拡幅部除く）
径間数・支間長：①４×65.380m＋②２×65.400m
形　式：①下路曲弦プラットトラス、②下路曲弦プラットトラス（新橋）

〈1993年6月4日，撮影・共に松村　博〉



（1:25,000　蒲原，吉原）

新(右)旧(左)の親柱が橋のたもとに立っている。